

Ⅲ 薬師寺の発掘調査

今回の調査は薬師寺伽藍の環境整備にともなう事前調査である。調査は食堂北方、北門西南方、および八幡院（六条大路側溝）地区である。なお、北門西南方地域は調査面積が小さくまた後世の破壊が著しく斜行溝を検出したにとどまり、記述を略す。

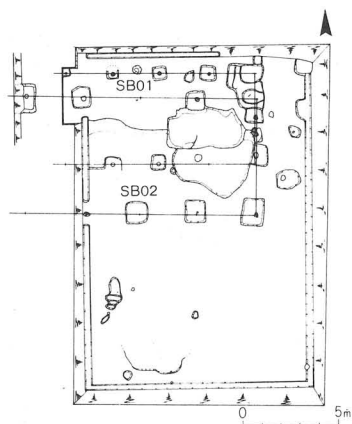
食堂北方地域 調査地は、北口参道をへだてた東側で、発掘された食堂基壇北辺から約30m北方の地点に当る。金堂西側にあった唐院の移転予定地で、昭和40年仮金堂建設にともない一部発掘が行われた所である。

土層の層位は、上層から、近年の盛土である茶褐色土層（厚さ30cm）、耕土である黒色腐植土層（20cm）、赤褐色粘質土層（30cm）、暗灰色粘質土層（10cm）、茶灰色粘質土層である。発掘区西北部の一部では、赤褐色粘質土層と暗灰色粘質土層の間に黄褐色粘質土層（20cm）が入り、また東南部では、赤褐色粘質土層と茶灰色粘質土層の間に四層に分かれる砂層がある。赤褐色粘質土層は若干の遺物を含み、ある時期の整地層で、暗灰色粘質土層以下が地山である。

遺構：発見遺構は、赤褐色粘質土面で大小6個の土壇、暗灰色粘質土面で、奈良時代と考えられる東西棟掘立柱建物2棟および土壇1などを発見した。赤褐色土面で検出した土壇は、全て不整形で発掘区全体に散在している。埋土、遺物から二群に分けられる。一群は、発掘区北寄りに東西に並ぶ2個の土壇で、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、瓦器を包含した鎌倉時代の土壇であり、もう一群は南部にある3個の土壇で、大量の瓦、平安時代の緑釉・灰釉を出土し、平安時代の瓦廃棄のための土壇と考えられる。もう1個の土壇は北端東寄りにあり、昭和40年の調査で大部分を掘っている。

暗灰色粘質土面の掘立柱建物2棟は、発掘区北部に重複して検出した。2棟とも2間×4間以上の東西棟建物と考えられ、北寄りのSB01は柱間寸法8.5尺（2.5m 復原尺0.295m）、南寄りのSB02は10尺（3.0m 0.297m）である。東妻をそろえ、柱穴の切合い関係からSB01がSB02より古い。

遺構面の削平や新しい土壌による破壊などのため、確認できなかった柱穴もあり（SB01では北側柱の東から第一番目、南側柱の第一、二番目、SB02では北側柱の第三番目の柱穴が未確認）、SB02は身舎梁間2間、東西両廂付き南北棟建物（4間×3間以上）になる可能性もある。柱掘形は、SB01が一边70cm前後の四辺形、SB02が一边1m前後の四辺形で、埋土は両者とも赤褐色粘質土である。SB01で7個の柱根が、SB02で6個が



第5図 食堂北方遺構配置図

遺存していた。また柱穴の立ち割りによれば、SB02の柱穴では柱の沈下防止のため掘形の底に平瓦片を入れこんでいた。柱掘形の深さは、SB01が15～20cm、SB02が40cm前後であり遺構面の削平が著しいことを示している。発掘区西北部で、暗灰色粘質土の上に、SB01の柱掘形がほりこまれた黄褐色粘質土があるが、これは削平された整地層の残ったものであろう。ちなみに、本発掘区遺構面を附近の調査で確認した遺構面の標高と比較すると本発掘区の遺構面が標高59.9～60.0m、本発掘区西北方の昭和40年9月高天商店の調査、西南方の昭和49年10月西僧房食堂調査の食堂西北角の両者の遺構面が60.3mである。後二者は、旧地表をほぼ残していると考えられ、本発掘区遺構面とは0.3～0.4mの差がある。このほか発掘区東北隅付近に柱穴2、南端中央付近に柱根2、SB02内に土壌1を検出したが、柱穴・柱根は本発掘区内では建物にまともらなかった。

遺物：遺物は、大部分赤褐色粘質土面の土壌から出土し、暗灰色粘質土面では遺構面の削平のためほとんど出土していない。瓦は、平箱約20箱におよび、南部の3個の土壌から特に多く出土している。軒瓦の大部分は、本薬師寺式複弁蓮華文軒丸瓦、同式偏行唐草文軒平瓦で、ほかに片岡王寺式細弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式重弁蓮華文軒丸瓦、橘寺式複弁蓮華文軒丸瓦各1点、平安・鎌倉時代の巴文軒丸瓦、鎌倉時代の連珠文軒平瓦などが数点出土している。

土器は平箱約30箱分出土している。南部の3個の土壌からは主に奈良末～平安初の土師器・須恵器、ほかに平安初期の緑釉花文線刻皿、平安中期の灰釉壺各1点が、北寄りの2個の土壌からは瓦器が出土している。このほか、南部の西側の土壌から、奈良時代の緑釉の建物模型の勾欄部分の断片、およびガラス片各1点が出土している。

2棟の東西棟建物の時期・性格については資料が乏しく確定できないが、一応次のように考えておきたい。時期は、建物の規模、掘立柱建物柱掘形出土の奈良時代前期の須恵器などから、両者とも奈良時代と考える。性格については、両者が東妻を揃えていてSB02がSB01の建て替えと考えられること、食堂・十字廊（食殿）の後方に位置することから、両者とも大炊屋などに関係する建物と考える。

八幡院地区 調査地は八幡神社北側であり平城京六条大路南側溝と右京七条二坊一坪内の2ヶ所の土壌を検出した。溝幅は約4.0m深さ約1.7mである。南岸には径10cmほどの丸太を30cm間隔に打ちこんだ護岸施設がみられた。溝内堆積土から奈良時代の須恵器、土師器、瓦が少量出土した。溝から薬師寺南面築地までの心々距離は約34.0mである。

IV 大安寺の発掘調査

大安寺旧境内において家屋新築等にとまなう事前調査を2件行なった。

北僧房 調査地は従来の大安寺旧境内発掘調査結果からみて講堂を囲む三面僧房の東北隅で、北僧房の東端附近と推定される。調査は33m×5mの南北トレンチ、9m×3mの東西トレンチを設定し、約192㎡について行なった。調査の結果、発掘区北側で中房の一部を検出したが、南半分は中世以降の土壌や攪乱によってすでに削平され、大房を検出することができなかった。鎌倉時代初頭と考えられる井戸1基を検出したに留まった。

遺構：中房・北面中房の梁行通りの礎石および根石列を2列検出した。1列に4つの礎石があり、大梁をかける位置にも柱をもつ梁行3間の総柱建物である。